No.　‘25－2
（No.121）
Apr. 2025

ISGG NEWSLETTER

伊東市善意通訳の会

C O N T E N T S

1.　蛇にまつわる南伊豆の伝説　菊池　善次郎　2
2. シェイクスピア、ワーズワース、木下杢太郎　中原　雅哉　4
3. K’ｓサロン報告　小松　透　小松　二美　8
相良　恭子　加藤　守康
4. 来るべき第５回英語講演会について　会長　主原　一雄　12
【事務局便り】　13
【編集後記】　14

蛇にまつわる南伊豆の伝説

菊池　善次郎

今年の干支に因んで「蛇」にまつわる南伊豆の昔話を一つ。私の生まれ育った南伊豆町大瀬にほど近い集落に「蛇石（村）」というところがあります。そこで昔から語りつがれている話です。

その前にちょっとお時間を。古来、蛇という動物はその容姿（見た感じ）から「気味が悪い、怖い、恐ろしい、魔物、化け物」などとして嫌われてきた一方、その生態的特徴から「神聖な動物、神の使者、幸福/長寿/富/再生/復活/繁栄などをもたらしてくれる有難い動物」として崇められてもきた、と考えます。みなさんはどうですか？蛇は好きですか？私は嫌いです。

一般的にも「蛇は気持ち悪い！怖い！恐ろしい！嫌い！」という人が多いと思います。世界を見ても、例えばイタリアの画家カラヴァッジョの「メデューサの首」（恐ろしい蛇の形にされた髪）のごとく蛇は魔物として扱われています。勿論、その地方や宗教によっては異なりますが。

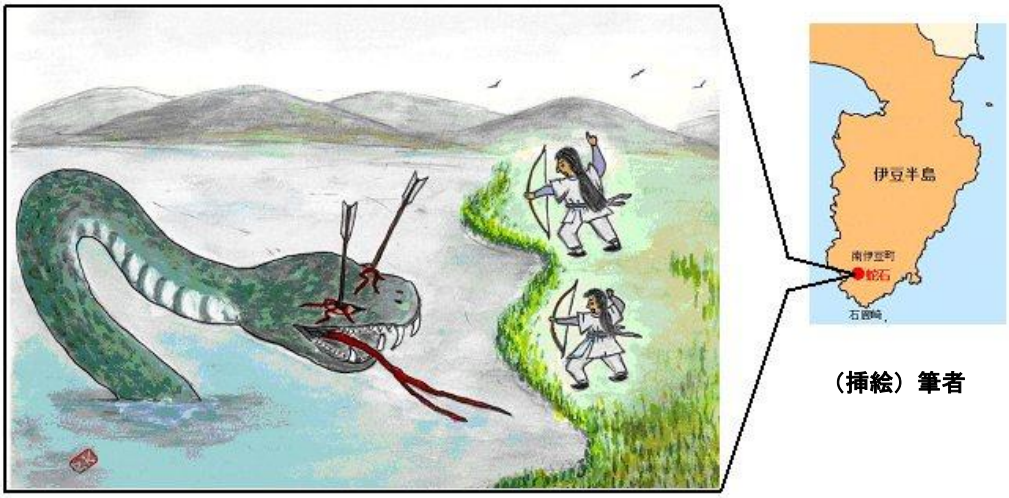
メデューサの首
（カラヴァッジョ）

日本の昔話の中でも殆ど蛇は魔物、化け物、恐ろしいものとして扱われることが多い様です。例えば、私たちの伊東で有名な伝説『大室山の大蛇穴』もその一つです。昔々、伊東の大室山の麓に大蛇が住んでいて、夜な夜な近くの村に出かけて悪事を働き、子供まで食べてしまうので鎌倉幕府２代将軍源頼家公に頼んで大蛇を退治してもらう話です。ガイド活動が盛んな頃大室山の麓で身振り手振りでお客さんに説明したことが思い出されます。

イントロが長くなりましたが、以下の南伊豆に伝わる大蛇の話は「大室山の大蛇穴」の話と同じく「恐ろしい大蛇」の話です。どうぞお楽しみ下さい。

＜南伊豆町蛇石（村）の名前の由来＞

むかし、むかし　南伊豆の大池におそろしい大蛇が住んでいました。大蛇は腹がへると人をも食ってしまうというので近くに住む村人たちや大池を経由して旅する行商人たちはたいそう恐がっておりました。



（挿絵）筆者

ある日、甲州（今の山梨県）から伊豆に絹を売りにやって来た一人の行商人が大池の近くを通りかかりました。大蛇は大池から出てくると「アッ」という間にその行商人を呑み殺してしまいました。

行商人には国に二人の娘がおりましたが、父の死を知って娘たちはたいそう嘆き悲しみました。「よし、父の仇を討ってやろう！」　二人はそう誓うと一心に弓術に励みました。

数年後、二人は弓術の優れた技を身つけることが出来ました。そして父の仇を討つ為はるばる伊豆にやって来ました。二人は大池近くの平らな場所に陣取り大蛇が出てくるのを待つこと数日。ある夜、ついに大蛇が湖面に現われました。「今がチャンス！」　姉の方は大蛇の右眼に向って矢を放ち、妹は左眼に向って矢を放ちました。2 本の矢はねらいたがわず大蛇の両眼を射止めました。大蛇は悲鳴をあげると大池から流れ出ている川に沿ってのたうちまわりながら下って行きました。やがて里近くで動かなくなり息絶えて死んでしまいました。

姉妹は見事父の仇を討つことが出来ました。

その後大蛇はその場で石になったということです。今でもその川岸には大蛇の頭に似た大

きな石を見ることが出来ます。　南伊豆町蛇石（村）と言う地名の由来はこの様な話から出たものだということです。　おわり

シェイクスピア、ワーズワース、木下杢太郎

中原　雅哉

普通の学生であり会社員だった私の、３人の偉大な作家たちとの特別な、極めて個人的であるという意味で特別な、関係についてお話しさせていただきます。

１．中学・高校時代

私が通った学校は、目白にある獨協学園。中高一貫の男子校で、伊東に縁のある木下杢太郎が出た学校です。英語の代わりにドイツ語のクラスがあったり、上に医科大学があったりして、医者を目指す生徒が多くいる学校でした。医者になるには金がかかるので、比較的裕福な家の子弟が多かった。私はちがったけど、学校は楽しかったし、いくつかの大切な出会いもありました。

向田豊作先生

英語の教師に向田豊作という先生がいました。ただひたすらに英詩の朗読をさせる先生でした。あの有名なワーズワースの「虹」をクラス全体で朗読したことを覚えています。”My heart leaps up when I behold a rainbow in the sky.”と、いまでも諳んじることができます。

さらに、この先生は木下杢太郎の大ファンでありました。英語の授業なのに、その詩をガリ版印刷でプリントして、授業中に生徒に配ったりしていました。英語の授業そっちのけで、木下杢太郎のことを語っていたこともあります。おそらく、獨協学園に職を得たのはこれが理由だと思われます。

高２の時に、埼玉県の狭山湖で全校マラソン大会が行われました。大会が終わって現地解散だったのですが、帰路向田先生と一緒になりました。先生は、「つかれたろ、はらもへったな」と、私を含めた何人かの生徒を寄り道に招待してくださいました。西武線のどこかの駅（小平だったかな）で途中下車し、養老乃瀧という居酒屋に入りました。詰め襟の制服を着た高校生たちがひとりの仙人風の男と連れだって居酒屋ののれんをくぐるという、ちょっとあぶない光景だったと思います。誰が一緒だったのか、なぜ私がそこにいたのか、全く覚えていません。先生はビールを飲み、生徒たちはたしかコーラ。生まれて初めての「もつ煮込み」も全員ごちそうになりました。先生は酒をのみながら蕩々と「砂の真砂に文かけば、また波が来て消しゆきぬ」と、オレンジビーチに歌碑もあるあの「海の入り日」の詩を唱えはじめました。その声は、正体不明のごちそうを犬食いする私たちの頭の上を泳いでおりました。

卒業間近の高３の冬に、私の父のビジネスが失敗し家計が崩壊しました。「就職するか養子に行くか、どちらかだ」と言われましたが、いずれの選択もできず、働きながら勉強を続けることにしました。辛うじて高校は卒業したものの、偏差値は下がり続けました。勉強したことを全て忘れてしまう前に、二浪して辛うじて神戸市外国語大学に入りました。

２．大学時代

鬱屈とした浪人時代を送った私にとって神戸外大という場所は、目がつぶれそうなほどまぶしく輝きに満ちた世界でありました。女子生徒が７割。びっくりしました。予備校にも女子はいたのでしょうが、お腹が空き過ぎていて男女の違いを認識するに至りませんでした。初めて本物の異性を見たような気がしました。私は、そのうちのひとりに速攻で言い寄り、付き合いはじめました。それが今の妻です。大学に入って２年生までは、バイトと部活（スキー）に明け暮れ、必須課目以外はほとんどの単位を落としておりました。今でも、必要単位数に足りずに焦っている夢を見ることがあります。

山崎隆司教授

３年生になって、このままではまずいと思い始めたころ、再び私の気持ちを勉強へと向けさせる出来事がありました。山崎隆司教授による英詩の講義です。学内で有名なハードな講義。平気な顔して、顔を伏せる弱気な生徒に無理な質問を浴びせ、答えられなかったら罵倒しヒーヒー言わせる。

単位は簡単に与えられないし、勉強しない人間は人でなし扱いする。神戸外大の生徒なら COD(Concise Oxford Dictionary)を常に携帯し、単語を引くときは一発でそのページを開けられるようになれ、とまで言われました。にこりともせず、決して褒めない。大多数の生徒にとっては、避けたい授業の筆頭でした。しかし、周囲の友人が不思議に思うほど、私にとっては毎回の講義が楽しみな大好きな授業となりました。使用した教材は「英詩の構造」(新倉俊一著)。詩は、ただ情緒的に感じるものではなく、論理的に批評できるものであるという立場を取ります。私は、夢中で聴講し、質問し、手を挙げて答えました。貼付した写真の先生は穏やかで優しい表情です。最近探し出した一枚です。おかしいなぁ。多くの生徒にとっては鬼でしかなかったあの先生は、どこでこんな顔を見せていたのだろう。授業では詩の構造を解くことを学びました。語源と語感、時代背景、聖書、古典、神話、そしてシェイクスピア。作品の中に隠された比喩と参照。名作中の言葉やセリフが引用され名作を生み、その名作がまた他の名作に引用されるという、詩のダイナミズムに没頭しました。シェイクスピアもワーズワースも、そのように勉強しました。

３．会社員時代

卒業後、富士通に入社し海外事業本部に配属されました。1991 年～1996 年の 5 年間、イギリスの事業会社へ出向となり、ロンドン市内から車で１時間半ほど西へいった、バークシャー州のウォーキンハム（Wokingham, Berkshire）という街に住みました。仕事は大変でしたが、ここからロンドンに食事に出たり、オックスフォードにお茶しにいったり、休日を楽しく過ごしておりました。学生時代の困窮が嘘のような生活でした。

娘が１０ヶ月の夏、スコットランドのスカイ島（Isle of Skye）を目指して、家族３人、車で旅行しました。途中何カ所か行ってみたかった場所に宿を取りながら、ゆっくりと旅を楽しみました。

最初に、シェイクスピアの生誕地であるストラットフォード・アポン・エイボン(Stratford upon Avon)に寄りました。観光客であふれかえっていましたが、花と木で上品なメイクをしたような美しい街でした。加えて、イギリスらしくない青空の下にイギリスらしいアンティークな家が並ぶ、明るい街でもありました。

途中何カ所かを経由してスコットランドに入り、スカイ島へのフェリーが出るカイル・オブ・ロカル

シュ（kyle of Lochalsh）という港の町を目指しました。分厚い曇り空の下、ひとけのない背の低い山が連なっている中、大きく左右に揺れた道を運転しました。

スコットランドの道

魔女が待ち構えるバーナムの森（マクベス第５幕）を想起させるような、壮大で不気味な景色に感じました。

夜に目的地に到着し、翌朝のフェリーを待って小さなホテルに一泊しました。

スカイ島に渡って、周辺をしばらくドライブしているとにわか雨に当たりました。突然の大雨はすぐにやみ、空の低いところに大きな虹が広がりました。

Dove Cottage

この島の天気はコロコロと変化するので、虹が頻発すると言われていました。ワーズワースの「虹」の言葉を重ねました。高校時代に向田先生に教えてもらったあの「虹」を見ました。

復路、ピーターラビットで有名な湖水地方（Lake District）に寄りました。ワーズワースの生誕地としても知られています。彼は世界を転々と移動した後、またここに戻り生涯を終えることになります。この地の美しい自然とそれを感じた物の心象風景は、作品の中で、絵を描くように色彩豊かな言葉で表現されています。私たちは、ワーズワースが過ごした家（Dove Cottage）に立ち寄り、またお墓に行って手を合わせてまいりました。

４．現在

途中を３０年ほどスキップします。現在は、伊東で自分の小さな会社を営んでおります。IT 関連サービスを提供する会社なのですが、今年から「経験の学校」というワークショッププログラムの提案を始めました。ライフスタイルを変えるような経験をできる場を、トピック毎（例えば、演劇やお茶やアートなど）に提供したいと考えています。

こえとことばの実験室

その第一弾は「こえとことばの実験室」です。俳優の福本鴻介君を正式に雇用し、このファシリテータとして働いてもらっています。彼は、慶応義塾大学在学時に、

オックスフォード大への短期留学でシェイクスピア劇を勉強し、卒業語は新国立劇場の研修所で修行し現在は舞台・テレビで活躍しているという本格的な役者です。

　昨年夏、福本君に米国オレゴン州のアッシュランド（Ashland）に出張してもらいました。オレゴン・シェイクスピア・フェスティバル（OSF）視察のためです。期間中は、街全体がシェイクスピア一色に染まります。毎回、メインの題目が決まっていて、昨年のそれは「マクベス」でした。日本にはシェイクスピアファンが多く、関連の舞台や劇団もあるのですが、このようなイベントが大規模に長期間開催されている例は無いそうです。「経験の学校」を企画する上で、大いに参考となりました。

学生時代に向田先生と山崎先生の生徒であったことも、伊東に住んでいることも、福本鴻介と出会ったことも、私にとっては普通のこととは思えない大きな幸運です。シェイクスピア、ワーズワース、木下杢太郎　―　なんとか、もうちょっと、これらの偉人との関係を強くするようなことができないかと、妄想を膨らませているところです

K’s サロン報告

小松　透

120 号に続き直近 3 ヵ月分の K’s サロンの報告を致します。メールでの報告は 1 月を小松(二)さん、2 月を相良さん、3 月を加藤(守)さんが担当しました。この報告はそれらをまとめたものです。

第 14 回 K’s サロン　2025 年 1 月 23 日 (木)

参加人数：　ISGG　5 名、ゲスト 5 名

Isabelle(女性)はアイルランド南西部の古都 Limerick（リムリック）の出身です。12 月から 2 月までホリデーでボーイフレンドと一緒に伊東に来ている。二人とも K's House でヘルパーをして働いている。二人で城ヶ崎海岸に行くのが好き。故郷の断崖（Cliffs of Moher と思われる）を思い出して嬉しいそうだ。アイルランドではサプリメントや有機食品などを扱う健康フードの店で働いている。肉は食べないが、魚や刺身は大好きで伊東の生活を

満喫している。伊豆稲取の吊るし雛と河津桜が 2 月に見られることを紹介したら是非見に行きたいと言っていた。

池田さん(女性)は東京世田谷から一泊で来た。K's ハウスは一泊の予約は出来ない事が多いが、たまたま空いていて泊まれた。中国と取引のある会社で仕事をしている。

鈴木さん(女性)はなんと伊東出身。K's ハウスで 1 年以上働いている。最近まで New Zealand に永住権で住んでいた。場所は北島の Hastings。家の都合で日本に戻って来た。New Zealand は物価が高くなって、今年旅行で行くが心配。伊東高校出身。加藤守康先生と在籍が重なっていた可能性がある。

Juan(男性)はアルゼンチン、ブエノスアイレス(Buenos Aires)出身のポルテーニョ(porteño)。ポルテーニョとは＜港の住人＞という意味だが、特にブエノスアイレス生まれの都会人を指す。「江戸っ子」のようなニュアンスがある。Alaska の高校に進み、大学はアメリカ東部の Princeton に行った。Biology の教師となり、ブラジルのアマゾンそして台湾に住んで教えた。授業は英語で行う。台湾では難しい漢字をたくさん覚えた。上海で 2 年間教え、中国語がペラペラになった。12 年ぶりに母国に帰る途中で日本に立ち寄った。上海は大都会で戻りたくないが、台湾にはまた行きたいとのこと。

張（チャン）さん（男性）は中国　深圳から。日本に来るのは 3 回目。家族とスキーや御殿場でのスケートを楽しんだ。子供はここの温泉が大好き。桜をぜひ見たい。河津桜は 2 月に見られるだろうとこの時は話したが、今年は遅咲きで間に合わなかったかもしれない。熱海桜はもう咲いていると伝えた。深圳から香港へは高速鉄道があり、15 分で行けるとのこと。Juan と張は中国語で全く自然に喋っていた。

小松二美　記

第 15 回 K's サロン　2025 年 2 月 20 日 (木)

参加人数：　ISGG　5 名、ゲスト 5 名

Isabelle(女性)が 1 月に引き続き参加してくれた。引き続き K's ハウスでヘルパーをしている。先月ひな祭りの話をしたので、既に東海館で見られることを伝えた。日本の作家は誰が有名かと聞かれメンバーが三島由紀夫、

大江健三郎等と答え、三島由紀夫の作品について英語講演会を予定していると話した。**Mark（男性）**はアイルランド Limerick の出身で、Isabella さんと一緒に旅行している。同じく K's ハウスでヘルパーをしている。1 月は参加できなかったが、今回は Isabelle と一緒に参加してくれた。皆どんなボーイフレンドだろうと想像を逞しくしていたが、長身でハンサムな人だった。温和しい方でコタツに興味を示していた。

Ellen（女性）はノルウェー北部 Alta 出身、活発な女性。

学生で６ヶ月間一人旅行中（初めての外国一人旅）。東京に１ヶ月滞在。京都にも１ヶ月行く予定。大都市には興味はあるが、静かな所でのんびりしたくて伊東に来た。温泉大好き。

ノルウェーの冬は彼女の家の辺りは海沿いなのでまだましで摂氏マイナス２０度、内陸部はもっと寒い。今の日本の気候はノルウェーの４月位で暖かく感じる。ノルウェーでも気候変動が感じられ、昨年６月には雪が降った。

ノルウェー北部に住むサミー人（Sápmi, Sámi, Saame とも綴る。昔はラップ人とも呼ばれていた）について話してくれた。トナカイ Reindeer を飼育し、肉を食べている。売ってもいる。シカより美味しい。ツンドラに住む白いトナカイは貴重で聖なる存在。トナカイの角で作った Good luck charm を見せてくれた。

John Paul（男性）は U.S.A、ボストンの出身。あまり自分からは話をせず聞き役。Anne さんとレンタカーを借りて一緒に旅行している。これから河津、南伊豆、そして富士山一周の予定。（元々長野をドライブする予定だったが、大雪の為に変更した。）

Anne(女性）はデンマーク出身。明日、河津桜を見に行く。日本には夏に来たが、日本脳炎などいくつかの予防接種が必要だった。徒歩の旅行が好き。今回、兵庫県も歩いてきた。四国八十八ヶ所霊場巡りや熊野古道にも興味がある。スペインの有名な巡礼の路 Camino de Santiago を２ヶ月かけて歩いてきたとの事。ポルトガルの路にも足を延ばして歩いたとの事。

メンバーの水谷さんが今回参加し、伊東歴史案内人として東郷平八郎館を紹介した。

寒い季節なので宿泊者も夜の外出を控えるのでサロンに集まりやすい。賑やかに過ごせた。

記：相良　恭子

第 16 回 K’s サロン　2025 年 3 月 13 日 (木)

参加人数：　ISGG　5 名、ゲスト 6 名

Oliver（男性）はハンガリー出身。ワーキングホリデーで来日。城ケ崎の 2 つのつり橋(門脇と橋立)を歩いてきた。3 時間くらい歩いた。

Talum（ティラム）（女性）はベルギー出身。ワーキングホリデーで来日。K's ハウスで 2 ヶ月働く。2 年前にも日本に来て、奈良・京都・岡山・鹿児島などを旅行した。Textile を専攻している。日本の文化をヒントに服飾の分野で活動したい。ベルギーには日系スーパーがあり、コンビニフードも食べられる。

あゆみさん（女性）は日本、福岡から。父親が住んでいた家が伊東市川奈にあり、時々家を見回りに来る。父親は画家で、家は画廊のようになっている。

Marie France（女性）はフランス出身。東京・谷中で買った日本風の T シャツを着ていた。日本に 2 か月滞在予定。箱根の K's ハウスに泊まってきた。K's ハウスは京都、広島など全国に 13 カ所ある。道に迷った時に親切に案内をしてもらい、日本人のホスピタリティに感激している。

Rachel（女性）はアメリカ Washington DC から来た。今日が日本の初日。IZOO に行った。明日は大室山を訪れたい。今後、熊野古道と豊川稲荷神社に行きたい。

Kevin（男性）はアメリカ、Chicago から来日。Chicago は華氏マイナス 5 度だった。寒すぎて雪にならない。日本は 3 回目。親は台湾系。バックパックを背負い旅行中。屋久島に行きたい。猫が好きで猫島に行きたい。藤の広場で撮影した猫の動画を見せてくれた。

座卓の下にコタツが入っていて、11 人でコタツを囲んだ。松川沿いの竹明かりが綺麗に見えた。

最近の参加者は、グループ旅行が減り、1 人か 2 人の個人旅行が増えているように感じる。

今回は ISGG に入会する田岡さんがはじめて参加してくれた。

最近封切り(ドラマ配信)された映画「将軍」から話が進み、三浦按針の九州上陸、伊東海岸での造船、メキシコへの航海、墓碑など、伊東と William Adams (三浦按針) の関係性を説明し、話に花が咲いた。

「伊東がもっと有名になるかもしれない」（Kevin 談）。

「今日は楽しかった」「日本人の親切さに感動しました」「このような会をぜひ続けてほしい」といった感想を外国人参加者から聞くことができ、今後の励みになると思った。

加藤守康　記

来るべき第 5 回英語講演会について

会長　主原　一雄

伊東に移住後、数年して知遇を得た伊東市在住のアメリカ人 Paul　Hoff 氏が伊豆半島の歴史について研究している事を知り、それについてぜひ講演会を開いて欲しいという私の要望に Hoff 氏が応えてくれることにより伊東市善意通訳の会が主催する英語講演会が始まりました。

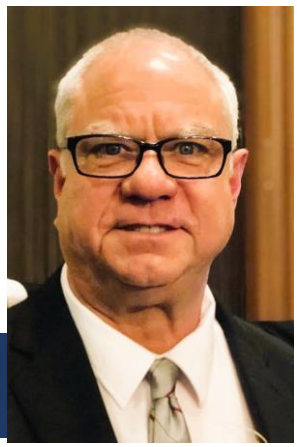
当初はコロナ禍の影響で無事第 1 回英語講演会を迎えられたのは当初より 2 年延期の平成 4 年でした。その後、幸いな事に有力な

伊東市善意通訳の会
Ito Systematized Goodwill Guide

第５回英語講演会

伊東市民の皆様に送るユニークで楽しい英語のプレゼンテーション！
英語の理解力に係わらず気軽に参加しませんか？

講師紹介：　Ted Jones
米国ヴァージニア州生まれ　ノースカロライナ大学修士号（Experiential Education）
米国及び日本の学校・研究機関でアウトドア教育を教える。　2024年より伊東市川奈在



講演：　限界を超えて
アウトドア教育と私の人生

2025年　6月7日（土）
伊東市ひぐらし会館ホール
静岡県伊東市桜木町1－1－17
入場無料
問い合わせ：
090－3308－3220（ヌシハラ）

開場：　1時半
開演：　2時
講演時間：約60分
（その後30分程の質疑応答
英語・日本語でどうぞ）
終演：　3時半

米国ヴァージニア州の農場で育ち幼少期より自然に対し深い興味を持つ。　ノースカロライナ大学にてExperiential Education(体験的教育学)で修士号取得後、日米の学校・研究機関でアウトドア教育を教える。　アウトドア活動がもたらす人間形成への影響力と重要性、日米での歴史・相違点等について自らの経験をもとにお話しします。

主催：伊東市善意通訳の会
後援：伊東市　伊東観光協会　伊東国際交流協会
伊東市教育委員会　（株）伊豆新聞本社
（株）シーブイエー　Izuvian Republic

講演者を得ることにより昨年3月には第4回を迎えることができました。　主催者側としてうれしかったのはこの4回の講演会を通じて英語力が高い人から低い人まで皆さんがそれぞれの楽しみ方を見つけられているという事でした。　伊東近隣在住の英語が第一言語か第2言語（日本語以外の母国語が第1言語）の方々はこのユニークな機会を非常に喜んでくださっています。　又、日本語が第1言語の私も含めての皆さんは講演内容の理解レベルは別にしても英語講演の雰囲気、講演者及び参加者との交流を楽しんでおられます。

さて、伊東市善意通訳の会として今回第5回英語講演会を開催できることは大きな喜びです。

今回の講演者は昨年伊東市に移住してこられたTed　Jones氏です。　Jones氏はノースカロライナ大学で「Experiential　Education」で修士号を取得後日米の大学・研究機関でアウトドア活動に関し教鞭を取ってこられました。　Jones氏はアウトドア活動が青少年だけでなくすべての人間にとっていかに大事かをアウトドア教育の変遷とみずからの経験を基に平易に講演されます。

英語力のレベルに係わらず多くの皆さんがこのユニークな講演会に参加される事を心より願っています。

【事務局便り】

4月16日に当会の年次総会が開催され提案された5つの議案を審議の末、無事可決されました。　総会後は伊東市役所8階食堂にて会員の懇親会が楽しく和やかな雰囲気の中、開催されました。

月例で開催されるイチゴサロン、英語サロン及びK's サロンも順調に開催されました。

K's サロンについては新年度より会員の負担減少の為、奇数月開催することになり、今年度の初回は5月15日（木）となりました。

6月7日開催の第5回英語講演会（Ted　Jones氏によりアウトドア教育と私の人生）にむけて多々の準備も進んでおります。

伊東市内の小中学校のＡＬＴをやっていたShimeika さんが伊東での任期を終え、伊東を離れる事になり3月8日、歓送会を行いました。

【編集後記】

またまた菊池さんのご投稿へのお礼から始まります。毎回　本当に有難うございます。

さて、今年は巳年、つまり蛇の年、蛇にまつわる南伊豆の民話楽しく読ませて頂きました。

私が、あまり余計なことを言ったりするとそれは「蛇足」、「藪をつついて蛇を出す」になりかねませんのでここら辺で。ご寄稿　重ねて感謝いたします。

　続いて、中原さん、シェイクスピア、ワーズワース、木下杢太郎のタイトルで中原さんご自身の事どもも含め見事に語り尽くしておられます。獨協学園、神戸市外大の恩師の方々のエピソード、英国での思い出話、加えて現在の活動状況など、興味深く拝読致しました。この先も、豊富なご体験を基に、当会でのご活躍を祈念申し上げます。

　そして、K’s サロン報告。何と多くの国々から様々な人たちがK’S House を訪れているのか、再認識した次第です。サロンに参加して下さった皆さんの様子やその背景などを細かく記録して下さいました。日本間で炬燵にあたりながらの四方山話、旅行者の方々にとっても、伊東の良い思い出になった事でしょう。小松さんご夫妻、相良さん、加藤守康さん、ご尽力有難うございます。

　４番目は主原会長による「第５回英語講演会」について。Ted Jones 氏による「限界を超えてアウトドア教育と私の人生」６月７日（土）が楽しみです。ひぐらし会館のホールが満席になる事を願っております。

私たち編集委員は皆さまからのご寄稿を心よりお待ちしております。

（T.K 記）Tea &Cake

伊東市善意通訳の会（ISGG）
会長　主原　一雄

（事務局）〒413-0232
伊東市八幡野 1324-40　　主原　一雄
e-mail：larryn@estate.ocn.ne.jp

（編集委員）　稲葉尚子　曽我廣子　加藤達雄